

仕事の現場

65

清水隆史

大工、石工などの職業で、一つの仕事を任切り、材料の扱いや作業の手順を考える責任者のことを「棟梁」と呼ぶ。作業が高度にシステム化した現代の建築現場では、このような立場を必要としなくなったため、最近はやまりに使われなくなっている言葉だ。

長野市穂保の工務店で働く松沢智則さん(33)＝同市若穂綿内＝は、昨年に着工した建築現場で、初めて棟梁を任せられた大工だ。それまで寺や神社などの複雑な建築物に携わってきた松沢さんが、棟梁として最初に持った仕事は、偶然にも幼いころから親しんだ菩提寺の本堂だった。

寺社の建築物を造る場合、まず工場の床に大量のベニヤ板を敷きつめ、屋根の部分の図面を原寸大に拡大する。棟を支えられた梁が何重にも重なった複雑な構造を確かめたり、三状の微妙な曲線で構成された部品を正確に作り、バランス良く仕上げるために欠かせない作業だ。この作図を元に、棟梁は材木に加工のための印を付ける「墨付け」を行う。間違いがあると、それ以

降の作業に大きく支障が出たり、強度が不足してしまう。「しっかりできているか、胃が痛くなるほど気がなったりしました。しかし、自分の思いを形にできるのは最高にうれしくもあります」切り出した材料は、基本的にくぎやビスを使わずに、削った木と木を合わせることでよって組み立てていく。寺社建築では、天井の構造がむき出しの場合が多く、継ぎ目や合わせ目も美しく見せねばならない。「一般住宅なら、三カ月で完成するが、例えば寺の本堂

大工・松沢智則さん

後世に残る建物を

などは、原寸図を作ってから一年以上かかる事も少なくない。

寺の工事は一年半が過ぎた現在も継続中だ。「まだ気が抜けませんが、自信を持てる仕事ができたと思っています。しかし、まだまだ学ぶことは多い。年配の職人さんの技術を吸収し、後世に残る建物にできれば、と思っています」

(フリーライター、イラストも)

(次回は11月16日掲載予定)

